

1 歳児保育に見る子どもの社会化過程と文化特異的養育行動

大阪成蹊女子短期大学	上原明子
関西福祉科学大学	亀島信也
神戸海星女子大学	竹内伸宜
大阪学院大学	荘巖舜哉

The Relations of Infant Socialization and Culturally-fostered Caregivers' Roll at the Day Care Center in Japan and China

Osaka Seikei Women's College	UEHARA, Akiko
Kansai University of Welfare Sciences	KAMESHIMA, Shinya
Kobe Kaisei College	TAKEUCHI, Nobuyoshi
Osaka Gakuin University	SOGON, Shunya

本研究は日本と中国の12ヵ月 - 24ヵ月齢の児を対象とし、子どもと保育者の行動を一定間隔内サンプリング法を用い、組織的に観察したものである。合計430セッションの行動観察データの分析を通じて、男女児の性差、及び文化差が比較検討された。主な結果として、中国の児は課題・自由遊び場面において日本の児よりも、泣き・ぐずりという行動が多く見られた。また保育者への接触は、日本・中国共に女児に多く見られ、女児の社会化が男児よりも早く進行していることが推測された。日本の女児が積極的に他児へ接触していることも、女児の早い社会化を裏づけるものである。一方保育者側の行動として、中国の保育者の子どもとの距離が日本に比べてやや遠く、ちらっと視線を送ったり、子どもを眺める行動が多かった。

【キー・ワード】文化比較，保育，性差，行動分析

This study is the first report of our research project for cross-cultural developmental study. This is also the first to provide direct observations of Chinese caregivers for one-year-olds using fixed-interval time span sampling methods. A total of 430 10-minutes observations were taken at day care settings in Shanghai, China and Osaka, Japan. Differences were found in cry/fussing category between Japanese and Chinese infants. Cry/fussing behaviors were found in Chinese subjects more frequently than Japanese ones. Socialization in female infants seems to have been facilitated by both cultural and biological factors. When infants were at play, different infant-caregiver interactions were evident between the two nations. Relations of infant socialization and the culturally specific caregivers rolls were also discussed.

【Key Words】Cross-cultural study, Child nurse, Gender differences, Behavioral analysis

問 題

1. 日本の子育て観

その昔、日本の子どもは時に邪険に扱われることもあったが（日本書紀天武記5年、今昔物語19巻9話、29巻29話、本朝世紀など）、一般的には非常に大切に扱われてきた。そのことは山上憶良の長歌に、子どもは親の宝、すなわち「子宝」と歌われていることや、近世日本にやってきた宣教師たち、新しくは明治前後に訪日した外国人たちが皆一律に（例、ルイス・フロイス「日本日記」、モース「日本その日その日」など）、親から体罰などが加えられることのない日本の子どもは幸せ者だと書き残していることから推測できる。

しかしながら日本人は、ただ子どもを可愛がってきただけではない。そのしつけ教育についても気を配ってきた。例えば能を芸術に高めた世阿弥元清は、年齢に応じた発達課題があることを論じて「風姿花伝」を著したが、これは日本最古の教育書であるといわれている。その後の徳川時代には、幼児教育論は大きく2つの流れ、すなわち儒教倫理を強調する教育論と、百姓町人を対象とした実践的な幼児教育論に分流した。そこで両者の子育て観の違いを見るために、武士階級の子育て論を貝原益軒に、庶民階級の子育て論を大原幽学に求め、それぞれの特徴を素描してみよう。

儒者の子ども観の特徴は早期教育にあるが、この考え方の背後には子どもは無知蒙昧であるが故に、悪に染まる前に指導・矯正していかなければならないという孟子の唯心論がある。確かに人間の性は善なのであるが、感覚にまかせればものに引かれて欲におおわれる故に、修養して心を養わなければならないのである。従って益軒は、当然のことながら礼節教育を重視し、「礼は天地のつねにして、人の則」であるから、まず子どもには礼を学ばせ、「およそ人の悪徳は矜で」あるから、謙譲の美德を教えなければならないという。褒めれば高慢になるので、子どもを褒めることは良くないし、「愛過ぐればかえりて児をそこなう」故に、甘やかすこともよくない。益軒の説く子どもの世界には、ルイス・フロイスが見た親子の姿は見あたらない。

実は17世紀ヨーロッパにおいても、これと全く同じ考え方が子どもの教育において採用されていた（Aries, 1973）。近世ヨーロッパでは、子どもは必ず何人かまとめて監督者のもとで、甘やかせず早くから厳格に、礼儀と羞恥の概念を教え込み、全てにして慎ましく振る舞わせることを、子育て4原則としたのである。儒教とキリスト教は全く異なる精神風土に成立した宗教であるが、子どものしつけ教育については同じ考え方に至ったことが面白い。

今少し、儒教の子ども観を眺望してみよう。儒者である益軒は当然、親に対する報恩孝行を説く。孝行者に育てるためには、「父たる者、威ありて恐るべく、行儀ありて手本に」ならなければならない、「子の賢不肖、多くは親の仕業なり」と述べる。ここには社会教育における父親の役割が強調されるが、母親の育児役割や社会参加は完全に無視されたままである。

儒教がこのように父性原理で社会システムを運用しようとしたのに対して、また「家」や「身分」、「長幼」などを重んじる儒教の教育理論に対して、土農工商制度を否定し、職や人間に尊卑はないと

説いた石田梅岩（1685 - 1744）を始祖とする石門心学は、より実践的な子育て論を展開した。心学では女性の社会的役割にも一定の評価が与えられたし、女子教育論も論じられた。個人を重視し、努力によって状況を変革できると説いた梅岩門下の心学者たちこそ、日本人の意識を近世から近代へ橋渡しする役目を果たした。手島堵庵や大原幽学、山片蟠桃などがその代表的な人たちであるが、人間そのものを直視した彼らはまた、憶良に始まる日本の子育て文化の伝統を受け継いだ人たちでもあった。

例えば大原幽学は、妊娠時の注意から幼児教育論まで、発達の順序を追ってわかりやすくしつけの必要性を説明した。その中心原理は儒教同様、「凡て物事、口で教ゆれば口で覚えるから、兎角行いを以て教ゆべし」で、モデリング学習が重視されるが、「無理に仕込みたがるは悪く、子供の気の進むときを待ち居てす可し」と、自主性尊重の重要性が強調される。儒教派が大人の主観（父性原理）でしつけをおこなうべしと奨めるのに対して、双方向的な発達観がここに見取れるのである。極めつけに彼は、「唯情の深き事が極上なり」と、その著『心得草』を締めくくる。

梅岩一門の心学には、伝統的な「子どもは宝」的な育児観と共に、あれこれ教え諭す前にまず受け入れるという母性原理が感じられる。確かに日本は中国から父性原理の儒教を受け入れ、その精神風土を形成してきた。しかし平安時代に既に文化の国風化がなされたように、土地に縛りつけられた水田稲作農耕が内包する母性原理をもう片方の精神的風土とし、日本人の意識構造は、いわば二重構造で運用されてきたのである（莊巖, 2001）。このように2つの異なる原理が混ざり合うことによって、例えば石門心学のような日本固有の社会思想が準備され、近代に通じる子ども観や人間観を準備した点は、日本がその独自性として世界に誇れるところである。では儒教の国、中国ではどのような子ども観に従って育児がおこなわれてきたのであろうか。

2. 中国の子育て観

郭沫若がその小学校時代を回顧して、青竹の鞭で体罰を受けたことを述べているが、解放以前の中国では体罰を容認してきた。そればかりかこれを積極的に奨励する傾向すらあった。そのことは、「不打不成才、嚴師出高徒（体罰なくば才能は生まれず、厳しい親方は優れた弟子を作る）」という言葉に具体化されている（大和田・馮, 1997）。儒教では上が下を、時には徹底した厳しさをもって教えなければならないのである。

中国には、人間関係に関してもう一つのルールがある。それは「自己人；ツーチーレン」と「外人；ワイレン」の区別である。「自己人」とは身内や友人、同郷人などに代表される自分の側の人であり、この関係の枠内ではセルフは無限に延長される。一方「外人」とは自分に無関係な人であり、関係は完全に切れている。血縁重視のこの考え方の弊害に気づいていた孔子は、人間の上部構造として「天」という超原理を持ち出し、上下と長幼の関係を軸として、仁義を潤滑油に人間関係を運用するのが理想と説いたが、それでも中国社会ではタテマエはともかく、ホンネでは「自己人」と「外人」が全ての関係を規定した。従って子どもといえども、人間関係で意識の切り替えをおこなわなければならない。いってみれば発達の早期に意識の二重構造をつくり出すことが要求されてきた社会、それが中国社会なのである。

当然のことながら、一方的に「ウチ」を向いた人間観は、解放に伴って表面的には大きく塗り替えられた。毛沢東の、「人民に奉仕する」思想はその代表である。しかしながら毛沢東思想が、人々の意識構造の深層部分まで変容させたかと言えば、全くそうではない。伝統的な家族主義は、あれだけの激動であった文化大革命にも全く影響を受けず、その後の一人っ子政策でむしろ家族の団結や一族の血のつながりが重視され、従兄弟同士が実の兄弟として育てられる（大和田・馮，1997）など、大家族重視の観念は全く変化していない。従って親の子ども観や教育方針にしても、何千年というのはオーバーであるとしても、実はほとんど変化していないと見る方が正解と言えよう。一例が、科挙時代に戻ったかと思われるほどの、激しい受験教育である。

改革・開放経済が急速に浸透した現代中国では、高等教育を受けることが即高収入に結びつく。北京や上海のIT関連業界の平均的月給は、大卒初任給で3千元（4万5千元）、博士課程修了の場合は9千元という。外資系企業のOLは平均で6千元の月給である。高等教育機関に進み、語学や情報関連の知識を身につけることができれば、一般労働者の年収に匹敵する給料を手にすることができるのであるから、なんとしても子どもは一流大学に進学させなければならない。そのためには年3万元支払っても、英才教育を施してくれる全寮制の学校に通わせる必要がある。あるいは家庭教師をつけ、塾に通わせ、とにかく英才教育をおこなう。これが市場経済導入後の、中国沿岸部の親子関係なのである。

このようなエリート教育は、それは家族に対する利己的な利益優先を防止するために、子どもを早くに家庭から切り離してしまおうとする政府政策と一致するからでもあるが、特に高学歴高所得家庭の欲求に合致する。従って最近また、全寮制教育施設での高水準の早期教育を求める傾向が強い。また、名のある幼児教育施設では多くの教員や教育補助者が働いており、ある意味、自己主張を強烈におこないながら、集団行動も同時におこなうという、日本人の目から見れば矛盾が働きそうな内容に矛盾を現すことなく、幼児教育がおこなわれている。

3. 居住環境と子育て方法

このように、日本と中国とではその子ども観や親の養育行動に共通点を持ちながらも、現実の実施側面において随分と異なる。それは両国の国民のもつ文化・歴史的背景の違いが作り出すものでもあるが、もう一つ、親子関係を比較するとき無視できない要素がある。それは生態学的環境に規定された居住スタイルの違いである。

最近、黄河文明に先立って、長江流域に高度な文明が成立していた多くの証拠が発掘されているが、ここで注目しておきたいのが建築様式である。日本の住居は最初に竪穴式から始まったが、長江文明では家屋は最初から地上に建設されており、床を備えていた。床は砕いた貝殻や、石、陶片などを粘土と混ぜて突き固め、更に上部を火で焼いて固めた高さ十数センチの構造であったが、湿気の上昇を防ぐ工夫が為されていたのである。その後、高床式の建造物も建設されたが、夏や殷、あるいは最初の統一国家秦などが雨の少ない黄河流域に建国されたためか、石の床や漆喰で固めた床が一般的であった。

一方、高温多湿でモンスーンの被害を受けやすい日本では、縄文前期（6000 - 5000年前）に既に

柱立て建造物が建設されていたが、これには当然床が設置されていたと思われる。また、日本における稲作は従来考えられていたよりも早期、縄文後期から晩期にかけて（3000年前）開始されたようであるが、弥生時代になり低地で大規模に水田稲作農耕がおこなわれるようになると、住居も低地に建設されるようになってきた。この時、湿気を避けるために、家屋に床構造が発達したというのは無理な推測ではない。穀物だけが高床式の倉庫に収納され、人間は地面に寝ていたはずがないのである。少なくとも古墳時代には、床構造を伴った大規模建造物が確認されていることが、この推測を裏付ける。

もう一つ、日本人の生活には世界に例を見ない特徴がある。それは日本文化が食用家畜を持たなかったことである。ブタは秀吉の朝鮮半島侵略に伴って初めて日本に薬として導入されたし、明治まで日本にはヒツジはいなかった。3世紀の「魏志倭人伝」には、「牛馬なし」と書かれているし、7世紀頃には牛や馬を耕作動力として利用し始めたようであるが、食用には利用されなかった。家畜を食用に利用しないことは、皮革の供給量を僅かなものにした。中国にしろ朝鮮半島にしろ、食用家畜を持った文化では履き物には皮沓が用いられてきたが、家畜を食用に利用しなかった日本では、明治まで沓は利用されなかった。ぬかるんだ地面を歩くには下駄が便利であるし、草履で汚れた足は水で洗うことによってきれいになった。こうして履き物を脱いだり足を洗って床に上がる生活様式が、日本に根付いた。

沓を履いて道から直接土間に移動し、机とイスで生活してベッドで眠る中国人の生活様式と、足を洗って床に座り、同じ部屋に布団を敷いて眠る日本人の生活様式は、人々の意識構造に大きな違いをつくり出した。この問題を論じるのは、しかしながら別の機会に譲り、日中における住居環境の違いが母子関係にどのような影響をつくり出したかの問題を、ここで簡潔に議論しておきたい。

周知の如く、日本では子どもが両親と一緒に同じ部屋で眠る。これは「川の字」文化といわれることもあるが、日本の親子関係を特徴づける現象である。同様に中国においても、少なくとも3歳頃までは子どもは両親と同じベッドで眠る（大和田・馮，1997）。しかし睡眠時以外の日常生活において、イスや机を利用する文化は明らかに親子間の距離を遠ざけるし、近接した関係に一定の制限をつくり出す。一方、常に親子が同じ平面、すなわち床や畳の上で生活を送るとき、子どもは容易に親に接近できるし、寝転がったときには両者の視線は同じ高さになる。障害物に妨げられることなく親子が常に直接接触しあう関係にあるとき、親子を距てる心理的壁が低くなり、互いの間に一種の共存関係が成立し得る。この母子関係のあり方を、中国と日本の儒教教育の中に、逸話的に見てみよう。

よく知られている話に孟母三遷がある。環境が子どもに与える影響を心配して孟子の母親が三度住居を変えた逸話である。他にも孟母、断機の戒めとあって、学問を中断することのむなしさを説いた話もあるが、要するに中国では、母親であっても子どもを積極的に教え導くのである。

日本の寓話としては、中江藤樹とその母の物語が有名である。祖父母に従って伊予大洲藩に仕えていた藤樹は、長じて後、幼い頃に別れた母親を大洲に迎えようとしたが、母親は郷里を離れようとはしなかった。そこで母の恩を深しとした藤樹が脱藩し、故郷の近江小川村へ帰ってその生涯を母親と過ごしたというのが史実である。しかし民間に流布した逸話は少し違う。幼くして母と別れた少年藤樹は、大雪の中、母に会いたい一心で小川村を訪ねたが、母は勉強途上なりとしてその心を鬼にし、

少年藤樹を家にも入れずに追い返した。このような母親の心が通じて、研鑽を積んだ藤樹はやがて近江聖人と仰がれる賢者になったという話である。

この2つの逸話は似ているようでいて、実は日本と中国の異なる母親像を描き出している。いずれの母親もわが子を愛するのであるが、孟子の母が自らのイニシアティブで積極的に動くのに対して、藤樹の母親は受け身で待つ。中国の母親は女性であっても父性原理に従って行動するが、日本の母親は母性原理から踏み越えることがなかったことを物語っているのである。

ところで儒教は、親子関係は絶対的構造であると教える。子どもは親の言うことであれば何でも従わなければならないし、社会原理として下のものは、上の者の言うことを聞かなければならない。だから24孝の一人、孟宗のように親が筍を食べたいと言えば、寒中雪の上に寝てこれを溶かし、筍を掘って食べさせる。大和田はこのような、否定のしようがない絶対的な親子関係こそが一体感を強めると説明するが、これは日本の親子の一体感とは随分と異なる。

哺乳類の親は、子に対して哺乳をする。幼少のコドモは、親に対して絶対的に依存しなければ成長がおぼつかない。故にアタッチメントという親子の心理的絆が形成されたのであるが、儒教が説くように親子が絶対的な関係であれば、孟母三遷でも述べたように、親は積極的に子どもに関わっていく必要がある。これは、子どもの自発性を重んじた石門心学が説く親子関係とは随分に異なるし、中江藤樹の親子関係とも異なる。このような日本の教育の特徴を東(1994)は「しみ込み教育」と形容するが、しみ込むのを「待つ」関係と積極的に「教え込む」関係は、方法論的に全く異なる。地理的に近接し、文化的にも中国から大きな影響を受けた日本であるが、生態学的条件が異なることによって住居の構造や生産構造(畑作・稲作)を違い、それが日中両国の別々の意識構造に結びついた。

このような日中それぞれに形成された子ども観が、現実場面で子どもの行動にどのように反映されているのか、今まではその比較がほとんどなされてこなかった。そこで本研究では、1歳児の日常保育場面を詳細に分析することで、日本と中国の子どもの社会化のあり方に違いが見出せるか否かを検討する。

目 的

問題で論じたように、日本も中国も二重原理でその社会を運用してきた点で、ある種の共通性をもつ。例えば日本では、政治・社会システムは父性原理で運用されたのに対し、社会を形成する単位としての家族システムは、江戸初期まで部分的に母性原理が働いていた。室町時代には日本の女性の財産権は保護されていたし、遠野南部藩のように江戸初期まで保護されていたケースもあるが、これは「公」における女性の立場が尊重されていたことと無関係ではない。

一方、中国では春秋戦国時代から既に、政治・社会システムも家族システムも父性原理で運用されていた。これはこの時代に公が成立していたことを意味するが、偏私に対処できる公平性が期待されたからこそ、早くから公の必要性が認識されていたのである。こうして「天下に対して君主が公」が成立した(溝口, 1995)。逆に言えば、中国社会は私(ム)、すなわち自らを囲む自環(韓非子)を中心とする社会であった故に、公をタテマエとして強調する儒教が支配思想になり得たのである。

ところで人間関係は、好き = 嫌いに代表される情緒的な面が強調される世界であり、ホンネが重視される。天という公の概念をつくり出した儒教は、公こそが群に公平の倫理を保証すると教えるが、庶民はそんなタテマエは信用しなかった。彼らは公が成立する前の、個々のつながり性を重視し、私のレベルで動いたのである。だからこそ儒教は、一貫して「私」を「姦邪なり」と排したのであるが、公に租税を徴収され、戦乱の嵐にもまれ続けた庶民は、共同体のつながりの中で生きるしかなかった。こうして中国社会には、公と私という意識の二重構造が生まれた。

父性原理が強調されたが故に自私自利を主張し、タテマエとホンネを使い分けて生きた中国庶民と、中国から輸入された儒教の父性原理が、生産構造が内包する母性原理をついに破ることなく、社会システムに共存した日本の庶民では、異なるシステムがつくり出す精神の二重構造ではあっても、その質も内容も異なる。少なくとも中国の公と私が、つまり父性原理と母性原理が意識構造の使い分けにつながったのに対し、日本の場合は2つのスタンダードが対立することなく並存した。使い分けと並存が何をつくり出したのか、これをごく日常的な食事場面に見てみよう。

例えば日本も中国も同じように箸で食事をするが、日本の箸の先端が尖っているのに対して、中国の箸は指で持つ部分と物を挟む部分の太さが同じである。従って煮たり蒸した（中国では焼き魚はない）魚を食べるとき、先の尖った箸を使う日本人は、魚を皿の上に乗せたままつついて食べる。当然骨は、皿の上に残る。一方、中国の太さが同じ箸では、皿の上で骨を取り除くことはできない。従って箸で魚を取り分けて口に運び、舌あるいは指を使って骨をテーブルの上に吐き出す。日本人はこれを不潔と感じるが、中国人は掃除がしやすいと感じる。

食器の使い方も違う。中国では料理は大皿に盛られ、各自はそれを取り分ける小皿1枚と同じく小さな汁物用の碗を1個持ち、銘々が箸を延ばして大皿から料理をとりわけ、自分の小皿に運ぶ。一方日本では、料理は食べる量に応じて各自の皿に予め盛りつけられ、料理の乗った皿がそれぞれの前に並べられる。盛りつけや配膳は母親の役目であり、欧米や中国のように主人が肉を切り分けたり分配をすることはない。中国では家族それぞれが独立に、自分の食欲や嗜好に合わせて料理を取り分けるが、日本では主婦が、全ての家族の状態を推測した上で配分する。このような何気ない日常の食事場面ではあるが、何事においても細部にまでこだわりをもつ日本人と、大ざっぱでこだわらない中国人の、また女性の裁量権を尊重する日本と、男性が決定権を握る中国文化が内包する意識構造の違いが見て取れる。

育児観にしても同じである。当然のことながら、養育者の育児行動には文化的規範が反映されている。その規範は、感情制御行動や認知構造、身体コントロールの様式、周囲の環境への順応様式、また他者との関わりの様式などに、恐らく言語化されないレベルで意識内容を規定している。例えば少しでも濡れていればおしめを取り替える日本の母親と、おしめを装着すれば後で汚れを洗わなければならないから、それよりも子どもの生理的欲求に従って、その場で排泄させる方が合理的であるという中国式の考え方は、いわば対立構造にある。このような何気ない、養育者自身が意識していない日常的なレベルで、子どもの意識構造は文化特異的内容に塗り替えられていく。荘厳（1997, 1999）は、行動の根底にあるこの意識構造を文化特異的感情意識構造と呼ぶが、実は<それ>こそが、世代間に伝承されていく文化の土壌なのである。またそれ故に、時代が経過し社会が大変貌を遂げても、

「その国（文化圏）の人らしさ」が世代から世代へと脈々と持続するのである。

本研究はこのような視座の下に、親から子へと伝承されていく文化を醸成する土壌、すなわち文化特異的感情意識構造が獲得される過程を、文化特有の育児行動の中から見つけだそうとするものである。具体的には、上海と大阪における1歳児保育の観察を通して、次の3つの視点から、「日本人が日本人に、中国人が中国人になる過程」を考える。

1. その国の子どもがその国の人になっていくプロセスを、保育という現場から探してみたい。具体的には、中国の托児所と日本の保育所で育つ子どもたちと保育者の関わりのあり方を比較することで、生物学的な成熟発達の様相は同じであるが、それぞれの文化の中で子どもが育つ時に作り出される行動発達の様相の違いを、共通のカテゴリー分類に基づいた行動観察から検討する。

2. 男女の別なく自分の仕事を持って人生を送る中国と、男女の性別役割が根強い日本とでは、子どもの性という生物学要因が養育者の意識構造を規定し、男児と女児に対して養育行動が選択的に使い分けられている可能性がある。従って相互作用の文化間考察をおこなう必要がある。

3. 現在では当然、「七つまでは神の内」という言葉も死語になったが、幼少期には甘やかせても構わないと考える日本と、ヨーロッパ同様に、子どもは早くからしつけられなければならないと考えてきた中国のそれぞれの子ども観が異なっていることが、養育者の関わり方を違えている可能性を検討する。

方 法

【観察対象】 家庭を離れ、日中を保育施設で過ごす、12ヵ月～24ヵ月齢の男女児と、子どもたちを保育する保育者の行動を観察した。

【観察内容】 表1のような、＜保育者の関わり行動カテゴリー＞、および＜子どもの行動カテゴリー＞からなる行動カテゴリーチェックリストを作成した。

【観察手続き】 10分を1セッションとし、1人の対象児の行動と、その対象児に向けられた保育者の関わり行動を記録した。1セッションは30秒刻みに20単位に分割され、30秒ごとに当該行動の生起の有無が記録された。観察者はMDプレイヤーから時間経過をあらわすBEEP音をイヤホンで聞きながら、20秒観察、10秒記録を20回くり返した。3人の観察者間の主観によるチェックの偏りを少なくするため、観察対象児は自由遊びと食事場面それぞれにおいて、複数の観察者からほぼ均等回数の観察がおこなわれるように調整した。

【観察場面とその分類】 来所から降所までの保育室での全活動（午睡時を除く）が観察対象となった。ただし日本と中国では保育活動の展開のあり方が異なるので、「全く同じ」場面对応はできない。そこで分析にあたっては、まず全活動場面を通しての行動頻度を日中間で比較し、次に、課題場面/自由遊び場面、食事場面の二つに分けて比較をおこなう。最後に生物学的要因として男女を分類し、これを文化別によりカテゴリー化することで4群にまとめて、群間比較をおこなう。

【観察実施】

<上海における観察>

観察場所：上海市南市区M托児所・K師範大学付属保育園(2000年幼稚園と統合)でおこなった。

観察時期：第一回目観察は1999年9月7日～9月14日におこない、第二回目観察は2000年9月1日～9月8日(中国の新年度開始は9月)に、それぞれ3人の観察者がおこなった。従って、第一回目観察と第二回目観察の対象となった子どもたちはそれぞれ異なる。

観察対象児数：男児は16名であり、平均月齢は16.9ヶ月であった。女児は18名であり、平均月齢は18.7ヶ月であった。

観察セッション数：全場面は362セッションであるが、それは 課題/自由遊び場面291セッションと、食事場面71セッションで構成された。

保育者数：托小班、托中班合わせて延べ5クラスで観察をおこなった。担当保育員は各クラス2名。時間帯により保育補助者の入室がみられる。

表1 保育者と子どもの行動カテゴリー

保 育 者	1	抱く
	2	タッチ/接触
	3	立ったまま
	4	のぞき込む
	5	座る
	6	ちょっと見る
	7	視線を送る
	8	対面して見る
	9	話しかけ/繰り返し
	10	笑い声
	11	食べさせる
	12	食器を持たせる
乳 児	1	保育者への接触
	2	他児への接触
	3	物への接触/提供
	4	話しかけ/繰り返し
	5	笑い声
	6	ぐずり・泣き
	7	移動行動
	8	座る
	9	ひとりで食べる
	10	介助を受けて食べる

<大阪における観察>

観察場所：大阪府茨木市、社会福祉法人親和会未広保育園でおこなった。

観察時期：2000年4月18日～4月27日(新年度開始4月)にかけて、3人の観察者がおこなった。

観察対象児数：男児は6名であり、平均月齢は17.0ヶ月であった。女児は7名であり、平均月齢は16.7ヶ月であった。

観察セッション数：全場面は68セッションであるが、それは 課題/自由遊び場面54セッションと、食事場面17セッションで構成された。

保育者数：1歳児クラスの担任は、設置基準に従って保育士2名が担当した。

【検定】 検定はランク変換後の2元(国×性別)配置分散分析をおこなった。

結 果

上海の托児所における保育者-子ども間の、あるいは子ども同士の相互作用と、同じく大阪の保育所における相互作用の結果を、表2-1から表2-3に示す。ただし表2-1は、全保育場面を一緒にまとめたものであるが、日本と中国、男児と女児、それぞれの群別に整理した。同じく、課題・自由遊び場面と食事場面の結果についても、それぞれ表2-2、表2-3であらわされている。

30秒を1単位とするが、10秒の記録時間を必要とするため、実際には20秒が観察に当てられた。観察時間中、同一の行動が何度生じてても、ワン・ゼロ・サンプリングに従って、度数は1度数として処理された。

元来ワン・ゼロ・サンプリングで得られたデータは、行動のサンプル間隔の割合でしか表されない。したがって、単位のない無次元の量で、行動に費やされた時間や行動の回数を表すものではない(通常、過小評価される)が、今回の研究では便宜上、回数として本文中に記す。

また、全場面および場面別(課題・自由遊び場面と食事場面)についての、国×性別2元分散分析で有意差がみられた項目を、表3-1、表3-2、表3-3に記した。

表2-1 全場面の行動頻度

		セッション数						
		362	68	166	196	28	40	
		上海	大阪	上海男児	上海女児	大阪男児	大阪女児	
保 育 者	1	抱く	1.97	1.59	1.64	2.25	0.86	2.10
	2	タッチ/接触	3.64	3.97	3.25	3.97	3.11	4.58
	3	立ったまま	1.80	1.99	1.78	1.82	2.07	1.93
	4	のぞき込む	0.59	0.47	0.52	0.64	0.32	0.58
	5	座る	4.74	3.65	4.81	4.69	3.32	3.88
	6	ちょっと見る	1.11	0.63	1.10	1.12	0.89	0.45
	7	視線を送る	2.91	1.84	3.08	2.78	2.11	1.65
	8	対面して見る	2.03	2.22	2.36	1.76	1.50	2.73
	9	話しかけ/繰り返し	4.36	4.53	4.86	3.93	4.46	4.58
	10	笑い声	0.06	0.03	0.07	0.05	0.00	0.05
	11	食べさせる	1.46	0.56	1.84	1.14	0.54	0.58
	12	食器を持たせる	0.06	0.10	0.02	0.10	0.18	0.05
乳 児	1	保育者への接触	1.97	1.54	1.18	2.64	0.82	2.05
	2	他児への接触	0.87	0.99	0.92	0.83	0.39	1.40
	3	物への接触/提供	8.79	8.46	8.48	9.06	10.75	6.85
	4	話しかけ/繰り返し	2.42	2.06	2.80	2.10	1.61	2.38
	5	笑い声	0.30	0.21	0.36	0.26	0.21	0.20
	6	ぐずり・泣き	2.49	1.07	2.42	2.56	1.00	1.13
	7	移動行動	6.24	7.82	7.31	5.34	9.00	7.00
	8	座る	10.77	10.75	10.88	10.68	10.61	10.85
	9	ひとりで食べる	0.99	2.51	0.77	1.18	1.46	3.25
	10	介助を受けて食べる	0.52	0.44	0.33	0.68	0.57	0.35

表 2-2 課題・自由遊び場面の行動頻度

		セッション数						
		291 上海	54 大阪	130 上海男 児	161 上海女 児	24 大阪男 児	30 大阪女 児	
保 育 者	1	抱く	2.06	1.89	1.93	2.16	1.00	2.60
	2	タッチ/接触	3.64	4.39	3.29	3.91	3.17	5.37
	3	立ったまま	2.04	2.11	2.09	1.99	2.08	2.13
	4	のぞき込む	0.55	0.50	0.53	0.57	0.29	0.67
	5	座る	4.04	3.74	3.87	4.18	2.79	4.50
	6	ちょっと見る	1.17	0.72	1.17	1.17	0.96	0.53
	7	視線を送る	2.66	1.98	2.82	2.54	2.21	1.80
	8	対面して見る	1.67	2.15	1.88	1.51	1.13	2.97
	9	話しかけ/繰り返し	4.11	4.57	4.58	3.73	4.33	4.77
	10	笑い声	0.05	0.02	0.06	0.04	0.00	0.03
	11	食べさせる	0.31	0.09	0.30	0.32	0.00	0.17
	12	食器を持たせる	0.00	0.02	0.00	0.01	0.00	0.03
乳 児	1	保育者への接 触	2.10	1.81	1.35	2.70	0.96	2.50
	2	他児への接触	0.92	1.15	0.95	0.90	0.46	1.70
	3	物への接触/提 供	10.03	10.19	10.01	10.04	12.04	8.70
	4	話しかけ/繰り返し	2.73	2.28	3.22	2.33	1.83	2.63
	5	笑い声	0.36	0.22	0.44	0.30	0.25	0.20
	6	ぐずり・泣き	2.58	0.81	2.58	2.58	0.92	0.73
	7	移動行動	7.34	9.78	8.71	6.23	10.38	9.30
	8	座る	9.71	8.52	9.42	9.96	9.13	8.03
	9	ひとりで食べ る	0.31	0.07	0.34	0.29	0.08	0.07
	10	介助を受けて食 べる	0.15	0.13	0.09	0.19	0.17	0.10

表2-3 食事場面の行動頻度

		セッション数	71	17	36	35	4	10
		上海	大阪	上海男 児	上海女 児	大阪男 児	大阪女 児	
保 育 者	1	抱く	1.63	0.43	0.61	2.69	0.00	0.60
	2	タッチ/接触	3.66	2.36	3.08	4.26	2.75	2.20
	3	立ったまま	0.83	1.50	0.64	1.03	2.00	1.30
	4	のぞき込む	0.73	0.36	0.47	1.00	0.50	0.30
	5	座る	7.62	3.29	8.19	7.03	6.50	2.00
	6	ちょっと見る	0.85	0.29	0.83	0.86	0.50	0.20
	7	視線を送る	3.94	1.29	4.03	3.86	1.50	1.20
	8	対面して見る	3.51	2.50	4.08	2.91	3.75	2.00
	9	話しかけ/繰り返し 返し	5.38	4.36	5.89	4.86	5.25	4.00
	10	笑い声	0.07	0.07	0.08	0.06	0.00	0.10
	11	食べさせる	6.17	2.36	7.39	4.91	3.75	1.80
	12	食器を持たせ る	0.30	0.43	0.08	0.51	1.25	0.10
乳 児	1	保育者への接 触	1.45	0.50	0.58	2.34	0.00	0.70
	2	他児への接触	0.63	0.36	0.78	0.49	0.00	0.50
	3	物への接触/提 供	3.72	1.79	2.94	4.51	3.00	1.30
	4	話しかけ/繰り返し 返し	1.15	1.21	1.28	1.03	0.25	1.60
	5	笑い声	0.07	0.14	0.08	0.06	0.00	0.20
	6	ぐずり・泣き	2.13	2.07	1.83	2.43	1.50	2.30
	7	移動行動	1.75	0.29	2.25	1.23	0.75	0.10
	8	座る	15.10	19.36	16.17	14.00	19.50	19.30
	9	ひとりで食べ る	3.79	11.93	2.31	5.31	9.75	12.90
	10	介助を受けて食 べる	2.06	1.64	1.19	2.94	3.00	1.10

表 3-1 全場面での行動頻度比較

	上 海		日 本	
	男児 n=166	女児 n=196	男児 n=28	女児 n=40
保育者がちょっと見る	1.10	1.12	0.89	0.45
	<----- * -----> <----- * * -----> <-- * -->			
保育者が視線を送る	3.08	2.78	2.10	1.65
	<----- * -----> <----- * ----->			
乳児が他児への接触	0.92	0.83	0.39	1.40
	<----- * -----> <-- * --> <-- * -->			
乳児の移動行動	7.31	5.34	9.00	7.00
	<-- * * --> <-- * * -->			

* p < .05 ** p < .01

表3-2 課題・自由遊び場面での行動頻度比較

	上 海		日 本	
	男児 n=130	女児 n=161	男児 n=24	女児 n=30
保育者が接触	3.29	3.91	3.17	5.37
	<----- * -----> <----- ** -----> <-- * -->			
保育者が対面して見る	1.88	1.51	1.13	2.97
	<----- * -----> <-- * -->			
乳児が他児への接触	0.95	0.90	0.46	1.70
	<----- * -----> <-- * -->			
乳児のぐずり・泣き	2.58	2.58	0.92	0.73
	<----- ** -----> <----- ** ----->			
乳児の移動行動	8.71	6.23	10.38	9.30
	<-- ** * --> <-- ** --> <----- ** ----->			

* p < .05 ** p < .01 *** p < .001

表 3-3 食事場面での行動頻度比較

	上 海		日 本	
	男児 n=36	女児 n=35	男児 n=4	女児 n=10
保育者がすわる	8.19	7.03	6.50	2.00
	< ----- * ----- >			
	< ----- ** ----- >			
	< -- * -- >			
保育者が視線を送る	4.03	3.86	1.50	1.20
	< ----- ** ----- >			
	< ----- ** ----- >			
保育者が食べさせる	7.39	4.91	3.75	1.80
	< ----- * ----- >			
	< ----- * ----- >			
	< -- ** -- >			
乳児が一人で食べる	2.31	5.31	9.75	12.80
	< ----- *** ----- >			
	< ----- ** ----- >			
	< ----- * ----- >			
	< -- * -- >			

* p < .05 ** p < .01 *** p < .001

1. 保育者の子どもへの関わり行動

(1) 保育者と子どもとの身体接触

上海の保育者が「子どもを抱く」行動は、平均 1.97 回であった。一方大阪では、保育者が「子どもを抱く」行動は 1.54 回であった。つまり「子どもを抱く」という行動カテゴリーに、2 つの文化間での有意差は認められなかった。またそれぞれの文化、あるいはそれぞれの観察場面においても、「子どもを抱く」という養育行動と男女児という性差には有意差は認められなかった。

保育者が「子どもの身体に接触する」行動は、上海の平均が 3.64 回、大阪の平均が 3.97 回で、全観察場面を通した平均値に有意差は認められなかった。しかしながらこれを性別で比較するとき、課題・自由遊び場面における国×性別比較において、日本の女児が保育者から接触を受けた回数は 5.73 回であり、同じく日本の男児、及び中国の男女児に対する保育者からの接触よりも有意に多かった (p < .05)。

(2) 保育者はどのような姿勢で子どもと関わるか？

つぎに保育者が「子どもと関わる時の姿勢」に着目してみよう。子どもに触れたり、見たり話しか

けたりする際の身体の構えを「立ったまま」/「のぞき込む」/「すわる」という3カテゴリーでチェックした。

これら3カテゴリーについて、全観察の平均値では2つの文化の保育者間で、その姿勢に有意差は認められなかった。しかし、課題・自由遊び場面と食事場面を分けて比較したとき、日本の女児の食事を世話する場面で、保育者が「座って」関わることが、他の3群に比較して少なかった($p < .05$)。

(3) 視覚的交流

保育者が子どもを「見る」行動を、「ちらりと見る」/「視線を送る」/「対面して見る」、の3つのカテゴリーに分類してチェックした。

中国の保育者は日本の保育者に比較して、その保育時間を通じて子どもを「ちょっと見る」、あるいは「視線を送る」など、距離を置いて子どもの様子を見る行動が多かった($p < .05$)。これを場面と群間で比較すると、課題・自由遊び場面において、日本の保育者は女児を男児よりも「対面して見る」ことが多かったが($p < .01$)、食事場面においては女児を「ちらりと見る」ことが少なかった($p < .01$)。

(4) 音声・言語交流

保育者から1歳児に対しての「話しかけや繰り返し」については、両国の保育者間に差は認められなかった。子どもの言語発達において1歳という時期は、言語理解・言語使用、コミュニケーション能力が急速に進展する時期であるが、このような時期にさしかかった子どもに対する保育者の関わり方に、国による違いがなかったことは、保育者の養育行動が子どもの行動の成熟レベルに対応していることを意味する。われわれの観察は量的データとして記録されており、この問題に関する言語的関わり方の側面から分析することができないことは残念である。

2. 1 歳児の行動

(1) 手や身体での関わり

保育室での子どもの周りには、保育者や他の子どもたちが存在し、保育室に置かれた様々な物がある。外界にあるそれらの人や物に対して、子どもはどのくらい自分の側から接触し、働きかけているのだろうか。課題・自由遊び場面と食事場面の合計でみると、「保育者への接触」行動は上海が1.97回、大阪が1.54回であり、「他の子どもへの接触」行動は上海が0.87回、大阪が0.99回であった。また「物への接触」行動は上海が8.79回、大阪が8.46回の頻度であった。これら3項目でとらえた日本と中国の子どもたちの接触行動には、全体的には有意差が認められなかった。

ところがこれを男女の性別で見ると、日本の女児が他児に触れる行動が他の群よりも多かった($p < .05$)。一方日本の男児は、他児に触れる行動が最も少なかった($p < .05$)。しかしながら物への接触は、日本の男児に多かった($p < .05$)。

(2) 音声・言語的交流

子どもの「話しかけ/繰り返し」のチェックにあたっては、他者に向かってであっても、ひとりだけで遊んでいる時であっても、また言葉であっても、言葉になっていなくても、観察セッション中に子どもが音声を発したすべての行動をカウントした。10分の観察時間中に子どもがなんらかの発声をし

た頻度は、上海が 2.42 回、大阪が 2.06 回であり、国による違いは認められなかった。場面別、あるいは性別に分類した場合にも、有意差は認められなかった。また保育者側からの話しかけは上海が 4.36 回、大阪が 4.53 回であった。これは子どもの発声の、ほぼ 2 倍の頻度であった。

「声をたてて笑う」と「声を出してぐずる / 泣く」のカテゴリーにおいて、発声を伴う感情表出をチェックした。保育場面において子どもに楽しそうな表情があらわされたり、愉快そうに身をゆするなどの行動が認められる場合であっても、子どもが声たてて笑いをすることは非常に少なく、上海では 0.30 回、大阪では 0.21 回と、いずれの国においてもまれであった。声たてて笑いの前提には、ものごとの理解や子ども同士の関係などがより深まることが必要とされるのであろう。今回の観察では、笑顔や微笑や不快や怒りなど、正面から見なければ判定できない表情や、微妙な判定を要する行動カテゴリーは用いなかった。

「ぐずる / 泣く」行動には、両国の子どもの間で有意差が認められた。上海の子どもがこの行動を示した頻度が 2.49 回であったのに対して、日本では同じ行動が 1.07 回しか認められなかった ($p < .05$)。これを場面別に検討したところ、食事場面では日中間に差がなかったが、課題・自由遊び場面において大阪の女兒 0.73 回示したのに対して、上海の男児は 2.58 回、上海の女兒は 2.58 回と、いずれも日本の女兒よりも泣きの頻度が多かった ($p < .01$)。

(3) 移動行動

観察対象児の移動行動の大部分は歩行による。他に、滑り台を滑り降りる、子ども用自動車にまたがって足でこいで進む、四つ這いでおもちゃの自動車を押しながら進む、なども移動行動にカウントされた。全場面を通しての子どもの移動行動は、上海の男児に 7.31 回、同じく女兒に 5.34 回、大阪の男児に 9.00 回、同じく女兒に 7.00 回観察されている。上海の女兒は上海の男児および日本の男児に比べて移動行動が少ない ($p < .01$)。これを場面別に比較すると、食事場面では、上海が 1.75 回、大阪が 0.29 回と、食事中は基本的に多くの時間を「座って」(上海 15.10 回、大阪 19.36 回) 過ごしていた。逆に顕著な差が見られるのは、課題・自由遊び場面であり、上海の女兒の移動行動は 6.23 回で上海の男児の 8.71 回より少なく ($p < .001$)、また日本の男児 10.38 回に比べても、日本の女兒の 9.30 回に比べても少なかった ($p < .01$)。

3. 食事場面の子どもたちと保育者

(1) 上海托児所の日課表では概ね 11 時から 11 時半が給食の時間とされていた。実際には 10 時半頃から準備に入り、10 時 45 分頃から食事が始まる。20 分あまりで全員が食べ終わり、11 時過ぎには後片づけに入る日が多いように見受けられた。食事時間は保育室のテーブルを 4~5 ヶ所に寄せて、それぞれに、子どもが 4~5 人ずつに分かれて、着席する。日本においても 11 時過ぎから食事の支度に入っていくが、11 時半を中心とした、約 1 時間が昼食の時間であった。上海の昼食時刻がやや早いのは、上海の生活が早朝から始まることや、大人にも見られる昼寝の習慣に関係しているのであろうか。

(2) 食事場面では、多様な行動カテゴリーに有意差が見い出されている(表 3-3)。例えば子どもが「一人で食べる」行動と、保育者が「食べさせる」行動とに群間で有意差が認められる。上海の男

児は食事を2.31回しか自分で食べておらず、この数値は同じ上海の女児の5.31回よりも($p < .05$)、また日本の男児の9.75回よりも($p < .01$)、日本女児12.80回よりも($p < .001$)少ない。当然ではあるが、日本の女児は上海の男児よりも一人で食べていることが多いし($p < .001$)、上海の女児よりも多い($p < .001$)。

従って「保育者が食べさせる」行動は、上海の男児に最も多く見られ(7.39回)、上海の女児及び日本の女児との間に有意差が認められた(それぞれ $p < .05$, $p < .01$)。また同じ女児同士の間において、上海の女児が保育者に食べさせてもらう頻度は、大阪の女児よりも有意に多い($p < .05$)。「一人で食事する」ことが最も多い大阪の女児に対しては、食事場面において「保育者が視線を送る」ことが少なく、上海の女児に対する3.86回や上海の男児に対しての4.03回より有意に少ない($p < .01$)。同じく大阪の女児に対して、食事場面で「保育者が座って対応する」のは2.00回で、他の3群よりも有意に少ない(大阪男児6.50回、上海女児7.03回、上海男児8.19回)。

考 察

生活に織り込まれて早期に伝えられるそれぞれの文化の基底部について、上海の托児所と大阪の保育所における1歳児保育を中心に検討していく。

1. 成熟と育児文化との相互作用

(1) 保育室での1歳児

結果に示したように、保育室における両国の子どもの行動には、表面的には大きな違いが認められなかった。「座る」、「移動する」、「保育者に抱かれる」という、子どもが目覚めて活動している時間帯における基本的な身体のおき方については、上海の女児に移動量が少ないが、これは特に課題・自由遊び場面において強調された。「物への接触」や「保育者への接触」、「他の子どもへの接触」のような社会的行動や、「音声・言葉」によるコミュニケーションなどの行動発生頻度には、両国間の子どもに違いが認められなかった。これは子どもの移動や姿勢、ものや人への関わり方といった基本的な行動は文化規定ではなく、1歳児という発達の年齢的要因が強く関与していることを示唆している。上海女児の移動量が少なかったことは、女児のもつ生物学的な特性が反映している可能性がある。

しかしながらここに、行動内容をカテゴリー化してサンプリングする際に見落としてしまう内容がある。つまりこれらの基本的な行動は、それぞれの国の、文化の文脈の中で生じているという事実である。1コマを切り取ったときには同じ行動と見なされるものであっても、それぞれの行為は文化フレームの中で実行されているのであり、異なる意味を帯びる。ここで言う文化のフレームとは、子どもたちが生まれ・育ってきた環境とのアフォーダンスが自然につくり出すものであり、現象的には同じであっても、そこに生まれてくる文脈が異なる、そういう意識構造を指す。

例えばおもちゃで遊んでいる子どもが、床にお尻をつけて座る場面が生じる。日本ではそのまま遊び続け、場合によっては床に腹這いになっておもちゃを操作したり、顔を床につけるような場面もある。保育者はこれに対して別に気にもとめない。そればかりか自分も腹這いになるかも知れない。

一方、中国の子どもが同じく床にお尻をつけて座ったとき、保育者は子どもの両脇を抱えてお尻を床から持ち上げ、足の裏で支えてしゃがむ姿勢をとらせる。日中両国の保育現場にあるのは、床と姿勢の関係から紡ぎ出される子どもの「事実」としてのアフォーダンスなのだが、そこに保育者が関わることで、同じ事実異なる文化的意味が生まれてくるのである。なぜならば置文化の中では床は清潔なものであるが、土足文化の中では床は汚れているものであり、直に座るのは地面に座ることと同じ意味を持つからである。こうして子どもたちにはそれぞれ別の意識構造が強化されていく。保育者が子どもに対して示すこのような、一見何気ない行動内容こそが、文化による子どもの発達の水路づけ (canalization, Waddington, 1957) の方向を指し示しているのである。

(2) 泣く子どもと見守る保育者

新学期の開始時において、中国の子どもたちは日本の子どもたちよりも泣いたりぐずったりする行動が多く見られた。結果に示したように、それは率にして 2.3 倍以上になる。また、保育者が子どもに関わっていく様相であるが、日本のように保育者側から接近して関わっていくのではなく、子どもから離れたところから様子をちらりとうかがう行動が多く見いだされた。また完全に視線定位をして、離れたところから様子を観察する行動も中国に多かった。それぞれは大阪を 1 とするとき、上海の 1.8 倍と 1.6 倍ということになる。結果で明らかになったように、これら 3 つのカテゴリーには日本と中国の間で有意差が認められている。

さて、結果に示された「中国の子どもはよく泣く」という事実の背景には、どのような要素が横たわっているのだろうか。

日本の保育所では、途中からの入所を受け入れることがないわけではないが、基本的に期日を決めて入所式がおこなわれ、概ね全幼児が同じ日から保育を受け始める。そこで我々は、入所直後の時期は保育者も子どもたちの対応に追われており、部外者が立ち入ることは多大の迷惑になるので、4 月初旬の入所式から 10 日経過した時点で観察を開始した。観察を受け入れてくれた末広保育所は、0 歳から保育を受けている子どもと 1 歳児クラスに初めて入所した子どもとが半々くらいであった。

一方、上海の托児所では入所式のような特別の行事はなく、8 月下旬から新入所児がぼつぼつ登所をし始める。9 月になっても新しい子どもが加わり、観察を開始してからでも入所してくる子どもがいた。泣き続けている子どもは、数日前に入所したばかりという、新奇場面に十分対応し切れていない子どもたちが中心であったことが、中国の子どもがよく泣くという結果を導き出した可能性は残る。しかしながら、泣く子どもに対する対応は、明らかに日本と中国で異なる。

中国の保育者は、泣く子も含めて子どもたちの全体を、よく見ている。しかしながら、ケアをしたり関わりを持つことはあまり見受けられない。泣く子を抱くことは多少見られたが、話しかけたり宥めたりすることはあまり見受けなかった。この中国の保育者の考え方を象徴しているのは、「慣れるまで子どもは泣きます。短時間の保育から初めて、次に全日保育へと、2 度新しい事態に慣れさせるよりも、最初から全日保育をする方が子どものためにいいと考えています」という、上海 M 托児所所長の言葉であった。しかしながらこれは明らかに大人側の都合に合わせた解釈であり、子どもとの双方向的、あるいは子どもによってやり方を工夫するなどといった試みはなされていないことを示唆している。保育者のこの態度の背後には、儒教時代からの、大人が子どものあり方を決めるという意識

がかいま見える。

このような中国の保育方法に対し、日本の保育所や幼稚園においては、当初は「慣らし保育」という類の名称で、短時間の保育から開始することが一般的である。また、朝送ってきた親は、ぐずる子としばらく遊んで子どもの気持ちが安定するのを待って、保育所を離れることがよくある。日本は双方向的な関わり方をすると見えよう。

このように、子どもが泣くことに対しての考え方や、泣いているその時における関わり方に、母親あるいは保育者の個性以上に文化差が強く働いていることがわかる。子どもが泣くのは、自分の中で発生した身体的、あるいは精神的苦痛を介護者に訴え、その原因を取り除いてもらうためであり、日本の母親や介護者はこれに媒介的に関わっていく。ところが中国の保育者は（家庭観察はおこなっていないので、以下、保育者に限った記述とする）、子どもが泣いているのは子ども自身の「私」の出来事であり、保育施設という、「私」が集まってできた場では「公」の論理が優先し、子どもが自分の「私」を「公」に合わせるべきだという発想が認められるのである。

日本のように、泣く子どもに対して保育者が個別に関わっていくことはほとんどない。徐々にその泣きが強くなるような場合にはなされているが、介入は子ども自身の感情制御行動の発達を妨げると考えている節が見られる。放置されることによって子どもは、自分がウチの世界ではなくソトの世界にいるのだということに自覚し、意識の切り替えをはかる。日本の子どもがいつまでも自分の意識のウチとソトを切り替えることができず、土居武郎という「甘えの構造」を残し続けるのを見ると、意識の二重構造とはいえ、「私」と「公」が早い時期から区別される中国の子どもの社会化には見習うべきものがあるのかも知れない。成人式を迎えた青年男子の6割、女子の8割が、自分が大人になったという自覚を持たないといわれる日本とは、随分と違うのである。

(3) 1人で食べる日本の子ども、食べさせられる中国の子ども

それでは中国の子どもたちが、日本と比較して自立が早いのかということ、やや異なる側面も見いだされている。例えば保育のなかで、給食時間は特別の意味合いを持つ。いうまでもなく「食べること」は、生命そのものの維持・発展に直接に関わっている。また、「食べる」時には見、嗅ぎ、味わい、嘔む音・食器の音、舌ざわり・歯ざわり・手の触覚など、「すべての感覚」が活性化される。さらに、「食べるため」には上半身を立てた姿勢を保っておくこと、口に食べ物を入れ、その対象に合わせて顎・歯・舌を適切に使うこと、両手を有効に操作すること、嚥下、空腹感、満腹感、胃、腸（排泄）など、身体全体の意図的な運動や操作と、意識的・無意識的な内臓の動きとの共応が必要である。そうして最後に、食べることの楽しみ、作法、文化的側面を考慮しておかなければならない。「食べる」という行為のなかには、このように生物としての全機能が発動され、社会文化的な要因が重層的に絡みあっているのである。

そこでそれぞれの文化の中で、食事場面がどのように繰り広げられるのか、さらに、文化としての「食べること」に、子どもはどのようなプロセスを経て分け入っていくのかの問題が検討されなければならない。これを、行動観察の分析結果と、その場で見た食事光景の印象とに基づいて検討してみよう。

上海の托児所では托小班（8ヵ月～18ヵ月）と托中班（18ヵ月～24ヵ月過ぎ）を観察した。托小

班では、1 グループ 4・5 人の子どもが保育員を囲んで一つのテーブルの周りに椅子を寄せて座る。子ども一人づつに食物が盛られた食器とスプーンが用意されるが、それぞれの食べるスピードに合わせて、保育者が次々に子どもの口の中に食べ物を入れていく。その様子からはツバメの母鳥と子鳥たちが連想された。1 椀が終わると次の食べ物がテーブルに置かれる。手際よく進められて、食事の準備が始まってから全ての子どもが食べ終わるのに 30 分を要さない。

托中班の子どもは、午前の保育活動の後、トイレを済ませて、石鹸で手を洗い終えた順に保育室に戻ってくる。その間に、テーブルは食事の時間用に配置され、子どもはそれぞれ自由に位置選択をして席に着く。子どもが着席し終わったテーブルから、食器に盛られた食物とスプーンが配られる。受け取った子どもはすぐに食べ始める。全員がそろって食事を始めるのではなく、「いただきます」を言わない。食器が空になると次の品が入った食器が配られる。汁物とおかずとご飯ものの 3 品が基本となっていた。足りない子どもは食器を持って、お代わりを要求していた。食事が進まない子のところへは保育者が近付いて、手を添えて食べさせたり、保育者がスプーンを持って口に食べ物を運ぶこともよくあった。子どもに対する声かけはほとんどなく、保育者はルーティーン的に食べさせる。食事の時間は食事をするというリズムを、あたかも身体に刻むことが主となった関わり方であるような印象を強く受けた。

これに対して日本の保育所では、トイレ・手洗いを済ませた子どもたちが、それぞれの家庭から持参したナプキンとスプーンやフォークを持って、テーブルに着く。子どもたちの前に食器が並べられて、一人分の献立が整えられる。彩りが美しい。全員の配膳ができると、保育者が子どもたちの前に立ち、食事への感謝を述べて手を合わせ、子どもたちと一緒に「いただきます」と斉唱し、子どもたちは一斉に食べ始める。スプーンのコツが難しい時は、手で直接口に運ぶ子どももいる。保育者は全体に目を配りながら、食べるのが遅い子のおかずを食べやすい大きさにカットしたり、手を添えるなどの行動と、「美味しい?」とか、「あとちょっとね」などと励まして、子どもが一人で食べることへの援助をする。食事の場面では、「好き嫌いなく」食べるという栄養摂取の方法と、「自分で食べる」技能、「挨拶」し、「感謝」し、「みなで一緒に食べる」という社会的慣習とが、日々繰り返されて、子どもの行動を形成し、根づかせつつあるようであった。

目的で述べたように、中国と日本では、食事に関する様式が随分と異なる。その違いは、保育施設においても明確に認められる。まず一番大きな違いは、日本における食事は、仮に家族だけの食事であっても、それは「公」に準じる行為であるということである。子どもたちは、あるいは家族は、全員が揃った後に、頂きますという合図を共有して食事を開始する。それに対して中国では食事は「私」の行為であり、何を食べるか、あるいは「おかわり」をするかも含めて、その全てが個人の決定に委ねられる。

一方、日本では基本的に主食を除いて、おかわりという行為はない。また各自の食事は定量が盛り分けられて、もちろん自分の好きなものを多めに入れてもらうとか、誰かのお皿から失敬することが許されはするが、完全に「私」が自在化できるものでもない。また、盛りつけをする主婦は、家族の好みや当日の体調など、食事に関する全ての情報を把握しておくことが必要である。もちろんこれは中国の主婦(母親)がそのようなことをおこなっていないということの意味するものではないが、日

本の主婦（母親）は、常に家族の状態全てに対する気配りが要求されるのである。ここに、物事の細部にこだわる日本人の国民性と、目的さえ達成すれば何もこだわらない、「黒ネコでも白ネコでも、ネズミを捕るネコが良いネコ」という中国人の国民性が象徴されているのである。

2. 保育室の日常から透けて見えるそれぞれの国の文化背景

(1) すわること、歩くこと

異なる文化環境で育つ子どもたちの行動を、観察者の主観の入りにくい「単純な行動カテゴリー」で捉え、比較した。この方法を通して確かに、目の前で展開する子どもたちと保育者との行動と、その関わりの内容をチェックすることができたし、結果の比較から多くのことを知り得た。

しかしながら、観察を通して気づき、考えさせられることがあった。なぜならばこれらの「行動カテゴリー」は、実はギブソンのいうアフォーダンスであり、物理的環境をも含む文化全体が行動に具体化されているからである。例えば舞台の上で役者が演ずる時、最も難しいのが、ただ立っていること、すわっていることだという。「すわっていること」は、外部から観察して見紛うことがないという意味においては、単純・明確な行動である。しかし「そこでそのように座ること」は、例えば朝鮮族の女性の最も礼儀正しい着座の仕方が、日本の「あぐら座り」と同じであったり、マサイ族の休息が1本足で杖にもたれかかることであったりするように、他の文化には見られないような行動のバリエーションを含むという意味では、「すわる」という行為も文化とアフォーダンスの具体化なのである。

このことについて更に具体例で考えてみよう。例えば日本の施設では全く見られないものに、尿盆（中国式おまる）がある。中国の保育施設では、托小班・托中班保育室の壁際に尿盆が常置されている。だから子どもたちは、それが保育中であってもしばしば活動から離れて尿盆に座り、そのままの姿で歌を歌ったり手をたたいたりして活動に参加している。一度だけではあったが、尿盆に座った状態で食事をしている子どもも見た。

椅子に座る、床に座る、という2つの様態のアフォーダンスの違いに、実は観察以前から気づいてはいたが、観察項目を増やし過ぎないためにこの両者を「座る」項目でくくり、行動チェックを開始した。しかしながら実際に観察に入ってみて、区分する必要があったことを強く感じた。

中国の子どもたちは、ベッドに入る時以外は、靴をはいて床に足をつけて過ごしている。従って姿勢としては、立つか、歩くか、「椅子に座る」か、「しゃがむ」という行動になる。他方日本の子どもたちは、建物の入り口で靴を脱ぎ、カーペットと木の床の上で過ごす。だから「椅子に座り」また「しゃがむ」が、しょっちゅう「床にすわり」時には「寝転んでいる」。乳児の頃からの、座る、立つ、歩くという「身体」の使い方と、それを支える「地面・床」との関わり方において、まさに文化の基底に関わっているアフォーダンスのあり方に違いがあるが、これに関する議論は別の機会に譲る。

(2) オムツをしない中国の保育

中国の1歳児は、軽快に歩く。初めて托小の保育室に入った時、室内を歩き回る1歳児たちの様子が印象的であった。前項からの続きになるが、子どもたちが「歩いている」だけなのに、それは「中国の子ども」が、あるいはすでに「中国人」が歩いている、という身体の有り様を示していた。中国

の人たちは姿勢がよく、背筋を伸ばして軽やかな足さばきで歩く。身体の軸が、日本人の子どもよりも整っているのである。

中国の1歳児たちは、誰ひとりオムツをしていない。子どもたちに感じられた身軽な動きの大きな要因は、オムツをしていないことにもあった。

トイレット・トレーニングでオムツを外すのではなく、生後半年を過ぎるあたりからは、昼間はオムツをしないで育てることが一般的だという。それを可能にしているのは、一つには、尿意・便意に対応してすぐ使える尿盆が、子どものいるすぐ側に常時備えてあることだろう。また、おもらしをしても、「靴のまま歩ける床」の上にあるゆえに、モップでさっと一拭きして片付けがすむ。さらに、伝統的に、お尻の部分の布は重ねられただけで、股を開くとそのまま用を足すことが可能な幼児用のズボンが使用されており、観察時にも数人の1歳児が着用していた。

日本を含む、世界の多くの国々において、排泄訓練は子どもと養育者の間に葛藤をつくり出す。多くの育児書がこの問題を最重要事項の一つに取り上げているのは、子どもの自立の開始が排泄のコントロールと、身体的・精神的に結びついているからである。しかし例外的に中国では、親子の間にトイレをめぐる葛藤のない、あるいはあっても少ない養育がおこなわれている。このことが中国人の国民性にも影響していると推測するが、この問題は今後の研究課題としたい。

(3) 名前と人との関係

人との関係のなかで誰もが育っていく。一人の子どもが家族を離れて托児所や保育所に通い、他者のなかで生活する時に、「自分」をどのようにそこに馴染ませ、位置づけていくのであろうか。

大阪の末広保育所では、クラスの子どもの名前と誕生日とが絵入りでカラフルにデザインされて壁に張り出してあった。これは、日本の保育所ではごく当たり前に見られる風景である。朝、子どもたちが全員揃って保育が開始される時、出席がとられる。保育者が一人一人の名前を音楽にのせて呼ぶと、ある子どもは嬉しそうに、またある子は恥ずかしそうに、別の子はふざけて、自分が「ここです、ここです、ここにいます」ということを、声や身振りで応える。名前と呼ばれ、その名が自分であることを意識し、またクラスの子どもたちがそれぞれの名前を持ち、それと呼ばれることを知る。また、保育所には玄関口に靴箱、保育室に箱型のロッカーがあって個人に割り当てられている。それぞれの名前と、まだ字を読めない子どものために識別マークが貼られている。タオルやナプキン、コップやスプーンなど、個人の持ち物を毎日持ち運び、日本の子どもたちは「自分のもの」を知っている。観察した時期は新学期が始まってわずか10日経過した頃であったにもかかわらず、テーブルの上に置き忘れられたコップを保育者に尋ねられて、「　　ちゃんの」と指差していた。

子どもは毎日、このような物品のほかに、連絡ノートに登所カバンに入れて登所する。そのノートには、家庭での様子、保育所での活動が記入されて、保護者と保育者との連携が図られる。

他方、中国の托児所においては、いま述べた全てが見あたらない。保護者は、子どもそれだけを連れてきて保育室の入り口に立たせ、子どもはさっと保育室に駆け込む。それですべてであり、名前を呼んで出席をとったり、よく来たねとか元気ねなどの声かけを子どもにすることはない。また、使用する物品はすべて托児所の用品であり、共用である。

托児所の保育は午前8時に開始され、30分ごとを一区切りにして次々に活動が展開していく。そ

の時間その時間に、よく準備された活動内容が子どもの前に状況として繰り広げられていく。活動内容ごとに椅子の配置がさっと変えられて、着席するだけでおのずと活動に集中しやすい場面設定となる。もちろん、日本の保育や生活の中でも椅子を使用することが多くの時間を占めているが、幼児期から目覚めている時の全活動が、靴をはいて床の上に立つ中で展開する中国の場合とは、椅のつきあい方に違いがあるのだということを痛感した。なぜならば1歳の子どもたちが全員、移動する時にごく自然な身のこなしで椅子を運んでいき、座るからである。

3. 男児と女児：子どもの行動に見られる差異と養育行動に見られる差異

(1) 男女児間に違いがある行動はなにか

もし、男女児間に生得的・生物学的要因に大きく規定される行動発達の差があるとすれば、日本と中国いずれの国においても男女児差が同じ傾向で見出されることになるであろう。また、もし養育者との相互作用の結果として、性差が文化内要因に規定されるならば、日本と中国における男女児の行動に違いが認められるであろう。

中国で男女児間に統計的に有意な差が認められた行動は3つあった。2つの観察場面を合わせた全場面で男児がより多く「移動」し、食事場面では「保育者が食べさせる」行動が男児に多く、「子どもが一人で食べる」行動は逆に女児に多く見られた。これら3種類の行動については、日本の子どもに関しても数値上は同じ方向の大小が示されているが、有意差を見るまでには至っていない。

次に日本の男女児間で有意差が認められた行動カテゴリーは、全場面で2つ、課題・自由遊び場面で3つ、食事場面においては2つであった。全場面では、保育者が「ちょっと見る」ことが男児に対して多く出現し、子どもの行動としては「他の子どもへの接触」が女児により多く見られた。課題・自由遊び場面で保育者はより多く女児に「接触し」、より多く女児に「対面して見」ており、より多く「他の子どもに接触」したのは女児であった。食事場面では、保育者が「座って子どもに関わる」行動と、「子どもに視線を送る」行動に有意差が認められ、いずれも男児に対して多くの注意が払われた。

中国の子どもに見る男女児の差は、恐らく生物学的な性差に起因する発達上の差異をよく反映している。例えば一般的に男児は活動が活発であるが、上海の男児も活動が活発であり、食事時間中もうろろしたり、別の活動を始めたりすることが多い。その結果、食べるのが遅くなって保育者の手によって食事が口に運ばれる。男児により多く「保育者が食べさせる」という、問題への直接的な関わりが見られるのである。直接食べさせはしないが、日本の保育者も男児により多く「食べさせ」と働きかけ、その手段として男児の前により多く「座って」関わり、より多く「視線を送っている」。

このように、食事時間に男児に対してより多くの関わりをもつのは、日本でも中国でも、共通してみられる保育者の行動である。しかしながら、子どもの状態によって世話の質と内容を変えようとするのが日本の保育者であり、ルーティーン的に業務処理をおこない、個々の状態には関心を払わないのが中国の保育者の態度であった。そのことは結果の表3-3に示したように、食事場面において中国の保育者が子どもに食べさせていることと、立ったまま視線を送る行動が多いことに示されている。ただ、この件に関しては、日本の子どもの食事の自立が早く、その多くが保育者の手を借りずに一人

で食べていることとも無関係ではない。

しかしながら問題はもっと別の所にある。つまり考察 1 の(3)で、中国の食事は「私」の行為であり、対する日本の食事は「公」の行為であると述べたが、日本の子どもたちはある種の秩序に従って食事をする。例えば家庭で食事をするとき、母親から「こぼしてはいけない」と注意を受けたり、もしこぼした場合はそれがすぐに拭き取られるなど、細々した干渉を受けているので、自分の行為をコントロールしようとする注意が働く。一方、親自身がテーブルや床に、骨や皮、タネなどの食物の残りかすを吐き捨てるのを見ている中国の子どもたちは、食事にルールがあるなどということを含く自覚していないのである。町中でも田舎でも、人々は碗を抱えて外に立って食べたり、甚だしいときは碗を抱えて歩きながら食べている光景が日常である。これらの風景は、食事がいかに「私」の領域の行為であるかということを雄弁に物語っている。

課題・自由遊び場面において、中国の女兒に「移動が少ない」傾向と、日本の女兒に「他の子への接触が多い」傾向が認められた。これは保育されるという環境に、女兒の方がよりよい順応をしていることを示している。つまり両国いずれにおいても、女兒の社会化が男児より早く進んでいることが分かる。

(2) 乳児の養育に携わる大人たちのジェンダー

乳児が日々ともに過ごしている成人の男女は、どのような姿で男性・女性として、子どもの前に立ち現れているのだろうか。また子どもが男児であること、女兒であることに対して、どの程度同じような、あるいは異なった関わり方で接しているのだろうか。

中国の子どもたちが托児所で接する大人は、保育員も調理担当者もその全てが女性であった。現在、上海市の托児所に男性の保育者は一人も存在しない。その現状からすると保育は「女性の職業」、とされているのであろうと推察される。

父親も母親ともに職業に従事し、家事・育児全般に亘って夫婦が協力し、家族の生活を営んでいる。そこには家事・育児を固定的な性別役割として捉える観念は、皆無でないにしても、強くはなく、日本とは夫婦・家族のあり方が違う。また、働く両親に代わって祖父・祖母が子育てに携わることがごく一般的である。これらの問題が今後検討される必要があるだろう。

4. まとめと今後の課題

乳児が、周囲の養育者との関わりの中で、どのようにして自国の文化を自らのものとし、それぞれの文化圏の人になっていくのかを検証するために、中国の托児所と日本の保育所で育つ 1 歳児を、実際の生活の場面で観察した。観察に際しては、どの文化圏にも必ず見られ、また観察者の主観による判定の偏りが入りにくく、言葉・風俗習慣・文化を理解できない異国人の観察者にも見誤りの生じにくい、基本的で「単純な行動」カテゴリーからなる、チェックリストを作成した。

(1) 上海と大阪での観察結果を全体的に比較して、次のようなことが明らかになった。

「すわる」、「移動する」、「保育者に抱かれる」というような、子どもが目覚めて活動している時間帯における基本的な「身体のおき方」、「物への接触」、「保育者への接触」、「他の子どもへの接触」と

このような、子どもからの身体による「外界への働きかけ」、さらに「音声・言葉」による「音声コミュニケーション（の萌芽）」などについては、その行動発生の様相が、量的にはほとんど変わらないことが見いだされた。このような基本的な行動の発現には、生得的・生物学的な要因が強く関与していることが推察される。

また、他方、「泣く子」への保育者の対応、「食事場面の様子」、「課題場面」、「自由遊び場面」の展開の仕方には文化によって違いがみられ、それぞれの状況で暮らす子どもの行動や適応の仕方には、国×性別の交互作用に差異が見られている。以上の結果から、異なった文化で育つことによる行動形成は、1歳の時点で既にかかなりの程度進行していることが明らかになった。

(2) 子どもの性別による、行動の出現頻度の差異の現れ方は、国によって違った。これによって両国の、社会・家族・夫婦におけるジェンダーのあり方、及びその認知のされ方に差異が存在することが示唆された。

(3) どの光景からも、子どもが十分な注意の下に保育されていることが、いずれの国においても窺える。しかしながら、具体的な関わりのあり方は随分と異なる。食事場面での保育者の関わり方、保育場面での保育の内容と保育者の関わり方、排泄の位置づけ、家族の送迎時の様子などにみられるその違いは、意識された育児観、子どもへの期待のあり方、子ども観、人間観などを反映していることが見て取れる。またそれと同時に、あるいはそれ以上に、日常のあらゆる細部に埋め込まれて子どもを取り囲むアフオーダンスが、あらゆる機会とあらゆる瞬間に、子どもに文化の基底を伝えていることもわかった。

単純な行動を測度としたことにより、発達における成熟要因と文化要因の交互作用を、定量的に分析することができ、貴重な知見が得られた。しかしながら研究には、当然ながら方法の限界がある。今回見ることができなかった個体発達についての諸側面、あるいは集団に適応していく過程や共感性の発達などについて、新しい観察デザインの下で検討を重ねていくつもりである。

子どもたちは既に1歳時点において、十分に「中国人」であり、「日本人」であった。つまりこれは、1歳以前の段階において、それぞれの文化の基底部分が刷り込まれ、水路づけられていることを物語っている。従って、このような発達研究においてさらに起源をさかのぼるには、より幼い時期からの、家庭での養育の検証が絶対に必要である。幸い、我々は上海の華東師範大学学前教育学部と太い協力関係を築くことができた。従って今後は、もちろん我々自身が中国語を学び、家庭に入っていくことも重要であるが、華東師範大学において研究者を養成し、共同研究にもっていくことも必要である。執筆者の一人、荘巖は、華東師範大学の客座教授であり、今後とも荘巖を軸として共同研究を継続していく予定である。

参考文献

- Aries, P. (1980). <子供>の誕生 (杉山光信・杉山恵美子, 訳). みすず書房. (Aries, P. (1973). *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien regime*. Seuil.)
- 東 洋. (1994). *日本人のしつけと教育*. 東京大学出版会.

溝口雄三.(1995). *中国の公と私*. 研文出版.

大和田滝恵・馮宝華.(1997). 現代中国における初期人間形成：子育ての実体と育児書の意図. 恒吉僚子・S. ブーコック(編著), *育児の国際比較：子どもと社会と親たち*(pp. 181-200). 日本放送出版協会.

莊巖舜哉.(1997). *文化と感情の心理生態学*. 金子書房.

莊巖舜哉.(1999). 日本人と韓国人の文化特異的感情意識構造. *大阪学院大学人文自然論叢*, 35, 39-59.

莊巖舜哉.(2001). 2つの学生集団に見る感情意識構造の差異：河北大学と華東師範大学のケース. *平成10-12年度科学研究費補助金研究成果報告書* (pp. 5-33). 文化特異的養育行動と子どもの感情制御行動の発達：その日中比較.

Waddington, C. H. (1957) *The strategy of genes*. London: Allen & Son.

<謝 辞>

本研究は、平成10～12年度科学研究費補助金(「文化特異的養育行動と子どもの感情制御行動の発達」研究代表者 莊巖舜哉 研究課題番号 10041040)の助成を受けておこなわれた。本研究遂行に際してご尽力いただいた華東師範大学 學前教育與特殊教育學院 學前教育系 前学部長の朱家雄(Zhu Jiexiong)先生と専任講師の周念麗(Nian Li Zhou)先生に厚く御礼申し上げます。